

ジョージア (グルジア) 便り その43

『白鳥の湖を踊る』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

常日頃からバレエを鑑賞する習慣が無くても、『白鳥の湖』の名前くらいは聞いたことがあるだろう。クリスマスシーズンにデパートなんかで流れている『くるみ割り人形』の音楽と並んで、親しみがあるのでは？

もしもバレエの『バ』の字をかじったことがあるならば、『白鳥の湖』には純白の白いチュチュを着たヒロイン、同じく白いタイツを履いた王子が出てくることも知っているのではないかと推測されたことを悔しく思ったりした。それほどこの作品がメジャーである事の証である。

この王道バレエ『白鳥の湖』で僕はついに主役デビューを果たした。

初めてサンクトペテルブルグでプロの道を歩み始めた頃の僕にとっては考えもしなかった事である。バレエの代名詞である『白鳥』はロシアの代名詞でもある。劇場の伝統、街のシンボル、さらには国の威信までを舞台から感じ、そこには絶対的なおとぎ話の王子のイメージが求められていた。例えば高い身長、美しい手足、深い目鼻立ち：ディ

ズニーの王子をイメージすればよい。いくら超絶技巧の優れたダンサーでも身体的条件が当てはまらなければ、王子を踊ることはなかったし、逆に王子を踊ることができなければ、プリンシパルダンサーとして認められることもなかった。当時言わば異形の存在で劇場唯一の東洋人ダンサーであった僕は、憧れはあっても他人事のように夢にも踊る日が来るとは思わなかった。

所属劇場も移り、月日は流れた。6年半後のイタリア、サルデーニャで王子の役が回ってきたのである。

意外にもこの役は僕が今まで踊ってきた全幕バレエと比べると、体力的には余力が残る。よくロシアの先輩プリンシパルダンサー達は『白鳥は美しく歩けばよいだけ』と言っていた。しかし一番難しいのは歩き方に始まり、いかに王子らしく振る舞うかである。舞台設定は中世のプロイセン。どんなに濃いメイクをしたところで僕の顔はドイツ人からは程遠い。

見た目が東洋人であるからこそ余計立ち振る舞いで貴族らしさを表さなくてはならない。腕やかかとの角度、目

線が大きくものを言う。さらにチャイコフスキーが書いた美しいスコアといかに協調するかも優雅さを醸し出す大きなポイントである。そしてサンクトペテルブルグで学んだ僕に周りから求められるのは、憧れたロシアスタンダードの王子である。

サルデーニャの劇場からほどないところに、大きな干潟が広がっていた。多くのフラミンゴが飛来する場所であると言う。水には塩気があって、鳥の色も違うがここが僕の白鳥の湖である。

かつてバカにされた白タイツは誇りの白タイツへと変わるだろう。やっと僕も胸を張ってバレエダンサーと言える日が来た。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

